

が故也。惣て流通とは、未來當今の爲也(中畧)妙法蓮華經の五字は、三世諸佛共に許して未來滅後のため也云々(御議下廿五)此等の祖文を以て見るに明かに末法顯益の法華經にして、其の結要の法体は即是れ世尊久本の証得、本中の大本、極中の最極也。

上來の所述を本門付屬と云ふ、而も塔中に於て一經の中別して肝心の五字を特別に上行等に付屬せられたる故に塔中別付屬と云ふ。(未完)

三 秘 論

(承前)

高一 山岡義哲

第二章

第三項 本尊の本体

本尊の本体は如何なる者あるかを論ずるに二種の方面より論ず一を教門の本尊と云ひ他を觀門の本尊と云ふ、教門の本尊とは本尊の全体是れ久遠本佛の体を顯せる者也——觀門の本尊とは本尊

の全体是れ行者色心の實體を顯せる者ありとす。

(イ) 教門の本尊

是れ即三大秘法抄。報恩抄等に顯れたる本尊にして久遠釋迦牟尼佛を以て其の本体とす故に是れを教主本尊とも云ふべき歟

報恩抄に曰く本門の教主尺尊を本尊とすべし云々三大秘法抄に曰く壽量品に所建立者五百塵點當初以來此土有緣深厚本有無作三身教主釋尊是也云々壽量品の然我實成佛已來の文意も顯本の佛は我等已心の釋尊にして能顯の五百塵點によりて顯るゝ所顯の三身無始の本佛を云ふなり茲に於て宗祖自ら壽量品に顯はれし所の教主釋尊を彫刻し是れを妙蓮山法華寺(一尊四士)正中山本妙寺(二尊四士)との兩寺に安置せるとか云ふ(ロ)觀門の本尊

是れ壽量品に顯はれし本覺無作三身を以て其の本体とす、總勘文鈔に曰く已心と心性と心体との三は已心の本覺三身如來あり是れを經に説いて曰く如是相(應身如來)如是性(報身如來)

如是体 法身如來』是れを三如是といふ。此の三如是の本覺如來は十方法界を身体とし十方法界を心性とし十方法界を相好とす此の故に我身は本覺三身如來の身体なり法界に周遍して一佛の徳用あれば一切の法身は皆此れ佛法也云々更に今此れを詳言すれば此の本覺の如來は十方法界の五大を以て法身の体とし十方法界の五纏を以て報身の性とし、十方法界の一切衆生の大根を以て應身の形相とし乃至十方法界の一切衆生の三業四威儀智慧福德をして此の佛の力とし所作とし智慧とし福德とあす而して其住所は十方法界の國土にして無量億劫を経るも生なく滅なく無始無終不迷不覺の三身あり即之れを妙法蓮華經と名く、『御義』に曰く無作三身の寶號を南無妙法蓮華經と云々しかるに祖文或は此れを本佛と云ひ或は本法と云ひ或は三千と稱して其致一準ならず故に今此れ等を人法及主客の兩重に約して適確ならしめんとす。

始めに人に約して論せば此の本法の体三身即一の本佛ありとす、即ち本法の身をもつて法身とあ

し本佛の心を以て報身とし本法の形ちを以て應身となす是なり

次に法に約せば十界三千の依正法々互に相圓獨して無盡の妙用を顯はし凡夫所見の當位生滅を離れたる妙色心なり是れを妙法無作の本法と云ふべし『御義』に曰く三千世界の總体云々『本尊抄』に曰く今本地の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の淨土也云々前に引ける如く『總勘文抄』に曰く十方法界を身体とし十方法界を心性とし十方法界を相好とす云々と此の本佛を客觀に約す時は法界獨一の釋迦牟尼佛と云ふべし壽量の說相明らかに能顯始覺の釋迦牟尼佛によせて無作本覺を顯はす故に其本佛の名を又釋迦牟尼佛と云ふあり『壽量品』の或說己身或說他身」とよつて知るべし

次に主觀に約する時は此の本法本佛即ち行者色心の全体にして衆生事迷の當處忽ちに無作三身の覺体を成すとなす故に天地法界は三千悉く皆我体中に起伏して我れは此れ壽量の本主とあるなり、『御義』に曰く我とは法界の衆生なり十界巳々の

我を指して我と云ふなり云々『本尊抄』曰く所化以
同体也是即已心の三千具足三種の世間なり云々如
斯人法主客の別ありと云へども共に約従の不同に
してたゞ一つの確固たる本覺無作の三身あるのみ
此れ實に當家本尊の主体たるあり

審量日本覺無作三身

人—本佛 } 主—衆生
客—釋迦佛 }
法—本法 妙法 } 不二ノ南無妙
法蓮華經

然るに本尊の主体南無釋迦牟尼佛と書かずして
南無妙法蓮華經と題する所以は釋迦牟尼佛は是れ
別体の名號にして普編的意義を缺く故に此の意義
を補ひ本佛此法界絶對の最尊なる事を示さんが爲
に特に南無妙法蓮華經と題す換言すれば南無妙法
蓮華經を以て顯したる本佛は即ち中央の主体吾人
(本尊に向ふ時此の主体に具さに理(法身)智(報身)悲
應身)の三徳を具す事を觀じ疾く久遠の本因を誘
ふて即身に久遠の本果を開くべきあり

第三章 本門題目

第一項 五字の内容

五字とは此れ法華經一部の名號なり故に此れを

題目と云ふ喩へば一箇の人格を代表する爲め此れ
に名を附し何々と云ふ如し經に曰く『名妙法蓮華
經』と四信五品抄に曰く文珠師利薩阿難尊者惣括
三會八年之間ノ佛語ヲ題ニ妙法蓮華經ニ云々 五字是法
華一部の名號ある事知るべし然れども此れ一往の
説にて實は法華經一部の心にてあるあり喩へば人
の姓を呼ぶに何々と言ふは其の名の應せる人格其
者の實體を指す者なる如し『曾谷抄』に曰く南無妙
法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず法華
經の心あり体なり所詮なり云々 又曰く所謂妙法蓮
華經の五字をば當時の人々は名とばかり思へりさ
にては候はず体なり体とは心にて候云々 されば題
目を離れて法華經の心を訪ぬる者は猿を離れて肝
を訪ぬし墓なき龜なり山林を捨て、果の實を大海
の邊りに求めし猿猴あり云々 是れ宗祖當時天台の
學者に題目を以て經の名ありと思ひ此れを輕賤す
るの心を抱くものありしかば此れを呵せんとして
かく教へられたるあり

今時に於ても學者中又此の見を抱ける者あり曰

く宗祖此の名を勧め給ふ所以は、もつばら俗を引かん爲の術計のみ名よく何をかなさんと此れ實に
五字は一部の心なる事を知らざる爲なり『報恩抄
に曰く疑て曰く廿八品の中に何が肝心乎や？答へ
て曰く或は品々皆な事に從て肝心なり或は曰く方
便品壽量品肝心あり或は曰く方便品肝心なり或は
曰く壽量品肝心なり或は曰く開示悟入肝心なり或
は曰く十相肝心あり。問ふて曰く汝の心如何答ふ
南無妙法蓮華經肝心なり、『五品抄』に曰く妙法蓮
華經の五字は經文にあらず其の義にあらず唯一部
の意耳云々。正に知るべし五字は法華一部の意にし
て久遠本佛の智慧なりと云ふ事を吾人朝夕本佛の
智慧たる五字を以て本佛の本体に對して晶題しつゝ
あるなり『經に曰く』是人於佛教決定無有疑と
『釋に曰く』妙法經力即身成佛と成佛何を疑はむ

(以下次號)

興師身延離山考

中五 太田 純 志

宗門原始時代に於ける、諸先師の事蹟を莖才淺
學の輩等云々し奉るは、甚だたこがましき事にて
又難中の難事たり。其の研究資料に苦しむは勿論
なれど、史實の取捨撰擇等に至りては是れ眞あり
てふ自覺に到らざる已上、全々爲し得ざる所なり。
吾宗門分派史中、暗々裏にその萌芽を發せしは、
太田方の不讀迹門の異計に起因し、滅後數年にし
て富士興門流具現せり。之に付て、興師身延離山
問題古來の先哲間に所説甚だしく多岐にして、吾
等後陣輩の大に迷惑する所たり、彼云く波木井公
四箇の謗法によると、此云く、事實無根ありと、
或は云く、五一相對本迹問題と、或は云く、一端
の感情問題と、或は云々云く、と予傾日來該問題に關
せる史料の二三を得たるにより、左に提出し以て
先賢各位の御垂示を仰がんとするものあり。
始に當派より列舉せんか、六牙院海音潮公は其
著『本化別頭佛祖統紀』に「弘安八年乙酉 日向尊者
直ニ于身延ニ檀越波木井氏實長告テ日高祖ノ霜塔輪次
守レコト之ヲ也其式雖ニ顧命嚴重ナリト而爲レ法爲レ山ノ至